広島大学総合科学部紀要Ⅳ理系編，第31巻，17－29ページ，2005年12月

集団間比較の方向、別のカテゴリー共有度、特性自尊心が、優れた内集団成員に対する拒否的態度に及ぼす影響

礒部智加衣・浦　　光博

広島大学　総合科学部

The effect of the direction of intergroup comparison, sharing another category, and trait self-esteem on the rejective attitude toward a superior in-group member

Chikae ISOBE and Mitsuhiro URA

Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract: In a real society, individuals who do well on a task are sometimes exclusively treated from in-group members. It is because they may threaten the other in-group members' personal identity. This study examined whether such rejective attitude is constrained in the condition where the direction of intergroup comparison and sharing another category were manipulated. Seventy-six participants who are undergraduate students were asked to take a test of social intelligence and then received information about social intelligence. Using sex category as in-group, the direction of inergroup comparison was manipulated. After that, participants were received the feedback of their own point and an in-group member's point which are higher than their own point, that is, all participants were in the interpersonal upward comparison condition. At the same time, whether another category is shared with each other or not was manipulated, using arts-science category. Finally participants were asked the tendency of rejective attitude toward the comparison target, and debriefed. Results showed that in the condition of intergroup upward comparison and unsharing another category, individuals with low trait self-esteem constrain rejective attitude, although they are less skilled at avoiding the threat to their identity. This study illustrated that the motive to maintain and/or enhance their personal and social identity affect the tendency of rejective attitude toward a superior in-group member.

Key words: the rejective attitude toward a superior in-group member, the direction of intergroup comparison, identity-shift, trait self-esteem

問　　題

優れた人は他者から賞賛され、受け入れられやすいといわれる。特にある集団の成員が優れた成果を得たならば、同じ集団に属する他の成員（内集団成員）はその成員に非常に高い評価を与え、仲間

2005年10月１日受付；2005年11月１日受理

として受け入れようとすることが、社会的アイデンティティ理論（Tajfel & Turner, 1979）に関する一連の研究によって示されている（e.g., Hogg & Abrams, 1988）。この理論によれば、内集団に優れた成員がいることはその集団に対する評価が高まる可能性をもつからである。そうであるならば、優れた成果を得た人は内集団成員から高い評価を得て良好な対人関係をつくることができるはずである。しかしながら、現実社会においては、優れた人の足を引っ張る、いじめるなど、優れた成果を得た人に対して他の内集団成員が必ずしもよい反応を示さない現象がある。内集団成員の優れた成果は、その集団に対する評価を高めるにもかかわらず、なぜ他の内集団成員が優れた内集団成員に対してネガティブな行動をとることがあるのだろうか。

この現象が生じる過程は、社会的比較の観点から説明することができる。社会的比較とは、人が自己に関する不確かさを低減させようとして他者と自己とを比べ、正確な自己評価（自己価値）を行うことによって、環境に対し望ましい適応を図ろうとすることである（Festinger, 1954）。比較の対象と自身を比べた（比較過程）結果、その比較対象が優れていた場合、すなわち、個人間上方比較の結果自分の劣位が明確となり、自己評価や自己価値の低下を導きかねないのである。そのため、人は、自分より優れた他者との比較を避けたり、その他者から遠ざかったりすることがある（Pleban & Tesser, 1981）。

ここで、優れた他者であればどのような比較対象であっても脅威になるというわけではない。Festinger（1954）によれば、比較他者が自己と類似しているほど、その比較は自己評価に影響を及ぼす。内集団成員は外集団成員よりも類似した者としてみなされ、より有益な比較基準として見られやすい（Goethals & Darley, 1977）。これらのことから、優れた内集団成員との比較によって、他の内集団成員は特に自己評価に大きな脅威を受けやすいといえる（Brewer & Weber, 1994）。他の集団成員は、自己評価へ脅威を与える優れた内集団成員を拒否することによって、自己評価（自尊心・自尊感情）を維持・高揚させようとしていると考えられる。つまり、社会的比較の観点から考えると、他の集団成員は優れた内集団成員を拒否しやすいといえる。優れた内集団成員を拒否することは、他の内集団成員にとって一時的に好ましい脅威回避戦略になるのである。

しかしながら、個人にとって脅威であるからといって優れた内集団成員を拒否・排斥してしまうことは、その集団全体にとっても個々の集団成員にとっても大きなデメリットを持つ。例えば、優れた人を排斥した後の集団では集団成果があがらず、集団全体に対する評価を高揚することが困難になる。また、属する集団の評価が高まらない結果、その集団成員であるという側面での自己評価も高めることができないだろう。さらに、他の内集団成員からの排斥を考慮する結果、成員が優れた成果を公表しようとしなくなったり、得ようとしなくなる可能性もある（Juola-Exline & Lobel, 1999; Pappo, 1983）。これらはいずれも、優れた内集団成員を排斥することが、他の集団成員にとって、個人的な自尊心の脅威から逃れるというポジティブな効果を持つ一方で、種々のネガティブな影響も有することを示している。それでは、優れた内集団成員に直面したときに、その成員を排斥すること以外に、自己を脅威にさらさずに集団の評価を高めることはできないのだろうか。本研究の目的は、このような条件の特定を試みることである。

集団間上方比較状況が優れた内集団成員に対する拒否傾向に及ぼす影響

自己関連性の高い課題における優れた内集団成員との比較が、自己評価にとって脅威とはならない場合として集団間上方比較状況があげられる。人は、内集団が外集団より劣っている集団間状況（集団間上方比較状況）におかれた時、自分より優れた内集団成員との比較後に状態自尊心を高めることが示されている（Blanton, Crocker, & Miller, 2000；礒部・浦，2002; Isobe & Ura, in press）。人は

不満足な集団間比較に従事させられると、自己の属する集団をより肯定的なものにかえようと試みるという（Tajfel & Turner, 1979）。つまり、集団間上方比較状況では、社会的アイデンティティ（集団の成員性に基づいた自己概念の側面）が脅威にさらされているため、内集団を高めようという動機づけが高められる。そのため、優れた成果を得た内集団成員は、他の内集団成員にとって、内集団を高めることができる存在として、好まれ賞賛されやすいと考えられる。自己カテゴリー化理論（Turner, 1987）によれば、個人的アイデンティティから社会的アイデンティティへの移行は、特有個人として自己を知覚することから、何らかの社会的カテゴリーの交換可能なものとして自己を知覚することへの移行を意味する。集団間上方比較状況では、「私」から「われわれ」へのアイデンティティの移行の結果として、内集団成員と自己を比べる比較過程ではなく、内集団成員の評価を自己に反映させる反映過程が生起したと考えられる。従って、集団間上方比較では、他の内集団成員は優れた内集団成員をより受け入れようとするだろう。

一方、集団間比較でも、外集団より内集団が優れているという集団間下方比較状況では、社会的アイデンティティを高く維持したいという動機づけはすでに満たされており、集団間上方比較状況に比べ、社会的アイデンティティは高まらないだろう。そのため、そのような状況において内集団成員との比較に従事すると比較過程が活性化されやすいだろう（e.g., Brewer & Weber, 1994；礒部，2005）。優れた内集団成員との比較によって個人的アイデンティティが脅威にさらされ、その脅威回避のために優れた内集団成員と距離をおこうとする、つまり、拒否する傾向が高まるだろう。

集団間上方比較条件と優れた内集団成員への拒否傾向の関係に、特性自尊心が及ぼす影響

個人間比較による脅威からの回避戦略がどのようなもので、また、どの程度用いられるかに関連する要因として、その個人のもつ特性自尊心があげられる。多くの社会的比較の研究によって、低自尊心者は高自尊心者より、社会的比較の情報を好ましい意味へと再構築するスキルが劣っているため、社会的比較による脅威に対する回避戦略を適切に使うことが難しく、社会的比較によって感情や状態自尊心が低下しやすいといわれる（Taylor, Wayment, & Carrillo, 1996）。しかし、低自尊心者は間接的な自己高揚には従事しやすいという知見もある（e.g., Brown, Collins, & Schmidt, 1988）。そうであるならば、集団間上方比較状況は、低自尊心者であっても優れた内集団成員との比較の際に状態自尊心の低下を防ぐことが可能な状況要因であると考えられる。状況によって半ば自動的に社会的アイデンティティへの関心を高められた結果、反映過程が生起しやすいためである。事実、礒部・浦（2002）とIsobe and Ura (in press) は、特性自尊心が低い人でも、優れた内集団成員との比較による彼ら／彼女らの感情・状態自尊心の低下が、集団間上方比較状況において抑制されることを示している。したがって、低自尊心者は、集団間下方比較に比べ集団間上方比較状況において個人間上方比較後の状態自尊心の低下が低減され、その結果、優れた内集団成員を拒否しにくいだろう。一方、高自尊心者は、集団間上方比較－下方比較に関わらず優れた内集団成員との比較の際に、何らかの認知的戦略を用い脅威を回避することが可能であり、優れた内集団成員に対する拒否傾向に、集団間比較の影響はあまりみられないだろう。

アイデンティティシフトが優れた内集団成員に対する拒否傾向に及ぼす影響

優れた内集団成員による脅威を回避することができる要因として、さらに本研究では、別のカテゴリー共有度をあげる。Mussweiler, Gabriel, and Bodenhausen（2000）は、アイデンティティの多面性が個人間上方比較による脅威状況の回避に役立つことを示している。アイデンティティをシフトさせること、すなわち、優れた比較対象と共有するカテゴリーではなく、共有しないカテゴリーに意図

的に焦点を当てることにより、比較対象との関連性を最小化し、自己へのネガティブな影響を回避する戦略を用いることが脅威回避に有効であった。そしてこのようなアイデンティティシフトの使用にも特性自尊心が影響を及ぼすことが示されている。認知的回避を適切に用いやすいという特性自尊心の高い参加者は、自己脅威を回避したいという動機づけのもと、自分より優れた比較対象と異なるカテゴリーに属することを自ら顕現化させ、自尊心を維持していた。一方、低自尊心者は、そのような回避戦略をとっていなかった。つまり、比較対象と共有しないカテゴリーが存在することが、脅威回避を可能にさせるだろう。比較対象と同一の集団に属していたとしても、人は別の社会的カテゴリーにも所属している。もし集団という一つのカテゴリーを共有している対象との比較であっても、その集団以外の共有していない別のカテゴリーが存在すれば、人はその非共有である別のカテゴリーに焦点を向けることが可能である。

礒部・浦（2002）・Isobe and Ura (in press) は、集団間上方比較がもたらすネガティブな効果を緩和する要因として、このような「アイデンティティシフト」の影響も検討している。ネガティブな効果とは、上述したような集団間上方比較状況において集団アイデンティティの高まりが個人に与える影響を考える時、比較対象である内集団成員との心理的距離がより近づくことによるものである。心理的距離が近づくことで、自己関連性が高い課題における内集団成員との上方比較が、個人にとってより大きな意味をもつものとなり、個人的アイデンティティという側面での自己評価に大きな脅威となる可能性があると指摘している。結果は、集団間上方比較において、非共有の別のカテゴリーにアイデンティティをシフトすることができれば、肯定的感情を維持することが可能であることを示していた。

したがって、人は優れた内集団成員と別のカテゴリーを共有しているとき（別のカテゴリー共有条件）より、共有していないとき（別のカテゴリー非共有条件）に、その成員を拒否しにくいだろう。また、このような別のカテゴリー共有度の効果は、認知的戦略が不得手といわれる特性自尊心の低い人に比べ、特性自尊心の高い人において顕著であろう。

以上より、優れた内集団成員に対する他の内集団成員の拒否傾向に、集団間比較・別のカテゴリー共有度・特性自尊心が及ぼす影響を実験により検討する。仮説は以下のとおりである。

仮　説

1．集団間下方比較条件よりも集団間上方比較条件において、優れた内集団成員は拒否されにくいだろう
2．別のカテゴリー共有条件であるより別のカテゴリー非共有条件である時に、優れた内集団成員は拒否されにくいだろう
3．仮説１の効果は、特性自尊心が高い人よりも低い人において顕著だろう
4．仮説２の効果は、特性自尊心が低い人より高い人において顕著だろう

以上より、優れた内集団成員が他の内集団成員のアイデンティティに最も脅威を与え、状態自尊心を低下させやすいのは、集団間下方比較－別のカテゴリー共有条件だと予測される。このとき、特性自尊心の高さが優れた内集団成員の受容－拒否にどのような影響を及ぼすであろうか。Mussweiler et al.（2000）の結果では、特性自尊心が高い人は、アイデンティティシフトが不可能である条件において状態的なwell-beingが低いことが示されている。また、Brown and Gallagher（1992）は、社会的比較によってもたらされた脅威が大きい時、低自尊心者にくらべ高自尊心者は高い自己評価を維持するために、他者の評価をあまり高く評価しないことを示唆している。そうであるならば、集団間下方

比較において、アイデンティティシフトが不可能である場合、つまり、優れた内集団成員から最も大きな脅威を受けやすい可能性がある場合、特性自尊心が高い人は、その脅威回避のために優れた内集団成員を拒否しやすいかもしれない。

一方で、高自尊心者が他の認知的回避戦略を巧みに用い、優れた内集団成員による脅威を回避し、集団間下方比較－別のカテゴリー共有条件においても、特別に拒否傾向が高まることはないだろうという予測も立てることが可能である。礒部・浦（2002）・Isobe and Ura (in press) では、比較対象の情報を準実験的な手続きで統制し認知的回避を制御するような実験操作を行ったにも関わらず、高自尊心者は、集団間上方比較状況におかれていない条件においても十分に状態自尊心を高く維持していた。また、高自尊心者は、類似他者との上方比較にさらされた時にもネガティブ感情が生起しない、また、その課題に対する制御可能性を高く見積もることも示されている（Buunk, Collins, Taylor, Van Yperen, & Dakof, 1990）。

上記２つは、どちらも予測可能である。そこで、本研究では、３要因の交互作用について探索的な検討を行うことにする。

方　法

参加者

大学生76名（男性36名、女性40名、平均年齢19. 41歳、*SD*＝1. 24、18～22歳）。

独立変数

集団間比較（上方比較－下方比較）、別のカテゴリーの共有度（共有－非共有）、特性個人的自尊心（高－低）。これらは、すべて被験者間変数とした。

手続き[i]

参加者のリクルート

「社会的知能テストの検討を目的とする実験である」とし、心理学の授業の受講生、もしくは実験者の知人を通じて同大学の学生に実験への参加協力を依頼した。依頼をする際に以下の質問紙に回答を求めた。

(i)自尊感情尺度（Self-Esteem Scale; Rosenberg（1965）の日本語版；山本・松井・山成，1982；10項目、５件法（あてはまらない(1)～あてはまる(5)））(ii)集団自尊心尺度（Luhtanen & Crocker（1992）の翻訳版；渡辺，1994）：自らの性別カテゴリーに対し集団自尊心をどの程度持っているかについて回答を求めた（16項目、５件法（全くそうではない(1)～全くそのとおりだ(5)））。(iii)認知的構造化欲求尺度（Bar-Tal（1994）の翻訳版；浦，1999；20項目、６件法（全くあてはまらない(1)～非常にあてはまる(6)））(iv)「現在所属する学部・学科もしくは専攻がどれくらい理系的もしくは文系的であるか」と「高校生のとき理系・文系どちらに属していたか」

これらの情報をもとに、参加者のうち、理系－文系出身者が半数ずつ、参加者の性別が半数ずつとなるように、リクルートをおこなった。

実験手続き

実験では、性別カテゴリーを集団間比較の操作に用いるカテゴリーとして用いたため、同性３・４名ずつでの実験室実験を行った。実験室内は、参加者どうしが課題試行中や質問紙回答中に隣人の様

子をうかがうことができないよう、ついたてで仕切ってあった。実験者は男女各１名で、実験は参加者全員がそろい次第始められた。

実験目的の教示　参加者はまず実験の目的が告げられた。ここでは、参加者の課題の重要度を高めるため、社会的知能と社会での成功との関連性を説明し、社会的知能に関する研究がこれまで男性のみで行われてきたこと、今回の我々の実験目的は社会的知能を測定する「社会的知能テスト」と様々な関連性を知ることであると教示した。参加者の質問がないことを確認した後、社会的知能テストが参加者にとってどの程度重要であるかに関する質問（事前の課題の重要度）に回答を求めた。これは、社会的知能と社会生活での成功、直感的な処理能力がどれぐらい関連していると思うか、またそれらの能力が高いことが参加者にとってどのくらい重要であるかを測定するものであり、４項目に５件法（全くそう思わない⑴～かなりそう思う⑸）で回答を求めた。

社会的知能テストの実施　次に、実際に社会的知能テストを実施した。このテストは、写真に写った複数の人物の関係性を推測させるというテストである。「ボディ・ランゲージ解読法」（Archer, 1980；工藤・市村（訳），1988）に掲載されている問題から例題用と本番用の11枚を抜粋してテストを作成した。写真が掲載された問題冊子と関係性の選択肢が印刷されている回答用紙を配布し、例題（１問）を用い、テストへの回答方法を十分に理解させた。テストは２分間実施し、直感的に回答することが重要であり、時間内に10問全てに回答しなければならないと教示した。２分間、一斉に課題を行った後、実験者のうち一人がテストを回収し、採点のためだと言い隣室に移動した。

集団間比較の操作　一人の実験者が採点をおこなっている間、もう一人の実験者は参加者に対し、採点が終了するまでもう少し社会的知能テストについて説明を加えると告げ、以下の内容を教示した。「この社会的知能テストの得点が高いほど、学業の場・職場などにおいて好ましい業績をあげることが示されています。学校や職場などの現実社会において、男性のほうが女性よりも高い業績をあげ、社会的に高い地位につきやすいことが知られています。このような実際社会の性差の問題を考えると、社会的知能の高さにも男女の差が見られるのではないかと考えられます。実際、私たちがこの大学の学生に対し昨年調査を行ったところ、男性のほうが女性よりもこのテストの平均得点が高いという結果が示されました」。この情報は、男性参加者にとっては集団間下方比較状況、女性参加者にとっては集団間上方比較状況であることを意味する。

個人間上方比較・別のカテゴリーの共有度の操作　テストを回収してから３分後に、採点を終わらせた一人の実験者が入室した。「テストの成績は、問題ごとに得点が決まっており、正解した問題の合計得点できまる」とテストの採点方法を説明した後、参加者の成績表を一人一人に配布した。さらに、「ある得点を得た人がどのように他者から思われているのかを知ることが本実験のさらなる目的であり、以前に同様の実験に参加した人からランダムに選んだＡさんの情報を配る」と告げた。参加者に配布した本人の成績表とＡさんの情報の内容を操作することにより、個人間上方比較、また、別のカテゴリー共有度の操作を行った。具体的には、参加者の成績表には「あなたの得点は21点」と書かれており、Ａさん情報には、「Ａさんは（理系・文系）の（男性・女性）であり、得点は43点」と書かれ、Ａさんの情報の理系の部分と参加者と一致する性別に〇が印されていた。このような操作は、全ての参加者にとって、集団内（性別が同じである）における、個人間上方比較（参加者よりＡさんの得点が高い）を意味する操作である。また、Ａさんが理系であるとしたため、参加者が理系であれば、別のカテゴリー共有条件に、文系であれば別のカテゴリー非共有条件に属することになる。たとえば、参加者が女性で文系出身者であるとすれば、彼女は集団間上方比較－別のカテゴリー非共有条件に割り当てられたことになる。

成績表を配布した後、以下にあげる一連の質問に回答を求めた。

質問紙

(i)事後の課題の重要度：事前の課題の重要度と同一の尺度を用いた。(ii)拒否排斥尺度（前田，1998）：対象人物（Aさん）に対して拒否的-受容的な行動をどの程度とるかについて回答を求めた（14項目・7件法；絶対とる(1)〜絶対にとらない(7)）。(iii)操作チェック：自身と対象人物（Aさん）の社会的知能がそれぞれ、どれほど優れていたか、また、男性の一般的な社会知能・女性の一般的な社会的知能がそれぞれどの程度優れているか（全く優れていない(1)〜非常に優れている(5)）に回答を求めた。日頃、性差と社会的知能（他者を判断する能力）とは一般にどれくらい関係があると思っていたのかについて、男性と社会的知能は非常に関係がある(1)〜女性と社会的知能は非常に関係がある(5)で回答を求めた。また、日頃、理系もしくは文系であることと社会的知能の能力とは一般にどれくらい関係があると思っていたかについて、文系出身と社会的知能は非常に関係がある(1)〜理系出身と社会的知能は非常に関係がある(5)で回答を求めた。最後に、対象人物に実際の人をイメージしたかどうか（はい・いいえ）に回答を求めた。

参加者全員が質問紙に回答した後、ディブリーフィングを行った。

結　　果

予備的分析

特性個人的自尊心　特性自尊心尺度の信頼性は十分に高かった（α=.86）。平均値3.15（SD=0.72）に基づき、参加者を高自尊心者群（N=42，M=3.67，SD=0.39）と低自尊心者群（N=34，M=2.49，SD=0.44）に分割した（$t(74)=12.48$，$p<.001$）。

集団自尊心尺度　全項目の得点の平均値を算出し、集団自尊心得点とした（α=.68）。

認知的構造化欲求尺度　全項目の得点の平均値を算出し、認知的構造化欲求得点とした（α=.72）。

拒否排斥尺度　受容的な項目においては得点を逆転し、拒否的な行動の指標として全項目の得点の平均得点を算出し、拒否得点とした（α=.81）。

操作チェック

個人間上方比較　個人間上方比較の操作を確認するため、t 検定を行った結果、参加者自身の能力（M=2.04，SD=0.66）よりもAさんの能力（M=4.54、SD=0.62）のほうが高いと評価していた（$t(75)=20.47$，$p<.001$）[ii]。

集団間比較　集団間比較の操作を確認するため、t 検定を行った結果、女性の能力（M=3.09，SD=0.41）よりも男性の能力（M=3.38，SD=0.49）のほうが高いと評価していた（$t(75)=4.70$，$p<.001$）[iii]。

課題の重要度　課題を実施する前の課題の重要度（α=.68）と課題を実施した後の課題の重要度（α=.66）の平均得点は、それぞれ3.43（SD=.64）と3.29（SD=.64）であった。課題前の課題の重要度得点において、集団間比較×別のカテゴリーの共有度×特性個人的自尊心の共分散分析（共変量＝集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点）を行った。その結果、別のカテゴリー共有度（$F(1,65)=3.13$，$p<.10$）と特性個人的自尊心（$F(1,65)=2.98$，$p<.10$）に主効果がある傾向が認められた。別のカテゴリー非共有条件（M=3.34，SD=.63）より共有条件（M=3.53，SD=.64）のほうが課題の重要度を高く評価していた。また、特性個人的自尊心が低い人（M=3.29，SD=.65）より高い人（M=3.55，SD=.61）のほうが課題の重要度を高く評価していた。そのため、課題前の課題の重要度得点を共変量に投入し仮説の検証を行った結果、共変量を投入するかどうかで明確な差は認められなかった。したがって、以下の分析ではこの変数を組み込んでいない。また、課題を実施する前後の

重要度の変化を検討するため、課題後から課題前の重要度の差得点を算出し、その得点について集団間比較×別のカテゴリーの共有度×特性個人的自尊心の共分散分析（共変量＝集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点）を行った。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差は認められなかった。

性別カテゴリーと社会的知能の関係性　「性差と社会的知能とが一般的にどのくらい関係があると思っていたのか」という項目の平均得点は2.79（SD＝0.55）であった。男性もしくは女性であることと社会的知能の高さとの一般的な関連性の評価を知るため、性差と社会的知能の関連性の得点をそれぞれ従属変数とし、3要因の共分散分析を行った結果、主効果、交互作用ともに認められなかった。性別カテゴリーと社会的知能の高さとの間の規範的一致（Oakes, Turner, & Haslam, 1991）を参加者が事前に有していなかったことが分かった。

文理カテゴリーと社会的知能の関係性　「理系もしくは文系であることと社会的知能とが一般的にどのくらい関係があると思っていたのか」という項目の平均得点は3.24（SD＝0.63）であった。Mussweiler et al.（2000）は、社会的比較による脅威を回避したいという動機づけによってもカテゴリー顕現性が異なることを主張している。一方で、規範的一致の知覚がなされるか否かにより、カテゴリー顕現化が変化することが知られている。理系－文系カテゴリーどちらかと課題との規範的一致度を高く有していたならば、その条件における結果はカテゴリー顕現性の影響を反映している可能性も考えられる。したがって、操作チェックとして、理系もしくは文系であることの関連性の得点を従属変数とした3要因の共分散分析を行った結果、主効果、交互作用ともに認められなかった。実験参加者が理系－文系カテゴリーと社会的知能に何らかの規範的一致を知覚していないことが確認された。

対象人物のイメージ　対象人物に実在の人をイメージした人は19名、しなかった人は57名であった。そこで、対象人物をイメージしたか・しなかったかを共変量として、共分散分析を行ったが、共変量の説明率はいずれの変数においても有意でなかった。よって、以下の分析ではこの変数を組み込んでいない。

仮説の検証

拒否得点について、集団間比較×別のカテゴリー共有度×特性個人的自尊心を独立変数とする共分散分析（共変量＝集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点）を行った。その結果、集団間比較（$F(1, 66)=3.16$，$p<.08$）の主効果が有意である傾向が認められた。集団間上方比較条件（$M=2.44$，$SD=.08$）よりも下方比較条件（$M=2.64$，$SD=.49$）において、自分よりも優れた内集団成員を拒否する傾向があった。また3要因の交互作用も有意であった（$F(1, 66)=4.09$，$p<.05$；Figure 1）。

下位検定の結果、集団間下方比較条件において別のカテゴリーも共有するとき、優れた内集団成員に対し、高自尊心者（$M=2.43$，$SD=.15$）より低自尊心者（$M=2.98$，$SD=.17$）がその人物を拒否することが分かった（$F(1, 66)=6.23$，$p<.05$）。また、低自尊心者は、集団間下方比較におかれたとき、別のカテゴリー非共有条件（$M=2.50$，$SD=.18$）より共有条件において拒否する傾向が高かった（$F(1, 66)=4.16$，$p<.05$）。低自尊心者は、集団間上方比較条件（$M=2.38$，$SD=.15$）より集団間下方比較条件におかれたとき、別のカテゴリーを共有する、優れた内集団成員を拒否する傾向が高かった（$F(1, 66)=6.20$，$p<.05$）。

考　察

本研究の結果から、集団間下方比較条件よりも集団間上方比較条件において、優れた内集団成員は拒否されにくいだろうという仮説1が支持された。集団間上方比較におかれた時、内集団を高めたい

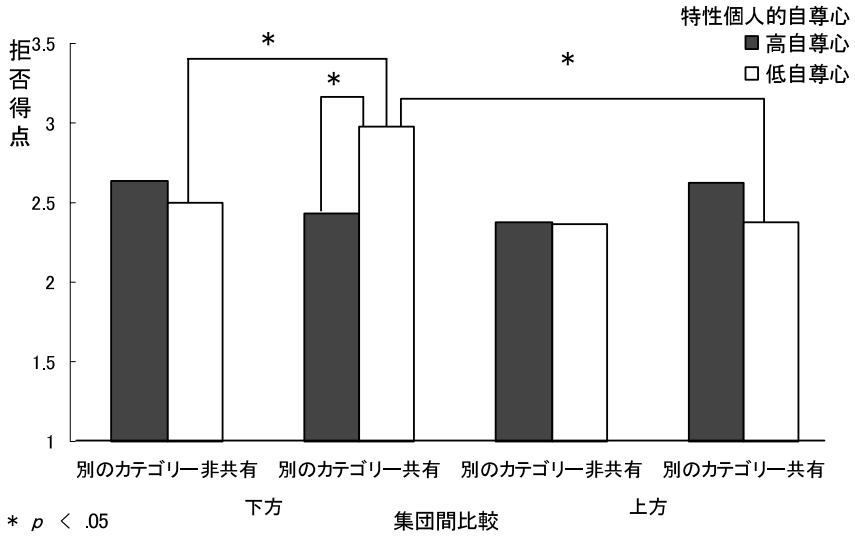

Figure 1. 拒否得点に、集団間比較、別のカテゴリー共有度、特性自尊心が及ぼす影響

と動機づけられ、優れた内集団成員への拒否が低減されたといえる。集団間上方比較条件において優れた内集団成員を受け入れることによって、社会的アイデンティティを高めることが可能となり、個人にとってポジティブ効果をもたらすためだと考察される（Blanton et al., 2000；礒部・浦，2002; Isobe & Ura, in press）。

次に 3 要因の交互作用が有意であったことから、優れた内集団成員との比較における脅威回避が困難な状況、つまり集団間下方比較－別のカテゴリー共有条件では、高自尊心者より低自尊心者のほうが比較他者を拒否しやすいことが示された。集団間下方比較－別のカテゴリー共有条件において、高自尊心者は、低自尊心者より拒否する傾向が高くなる予測も可能であった（Brown & Gallagher, 1992）。しかしながら、本研究の結果は、高自尊心者は集団間下方比較－別のカテゴリー共有条件においても、優れた成員を拒否する以外の何らかの脅威回避戦略をとった可能性を示唆するものであった。高自尊心者がもち得たであろう認知的回避戦略の一つに、課題に対する制御可能性を高く見積もることがあげられる（Buunk et al., 1990）が、本研究では、操作チェックにより課題の重要度を変化させるといった回避戦略を用いていなかった。今後、実際にどのような戦略を用いて脅威を回避しているのかを特定する必要がある。

また、この 3 要因の交互作用の結果は、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティを共に高く維持しようとする能動的な自己カテゴリー化過程が存在する可能性を示唆するものである。低自尊心者のみに限られるものの、礒部・浦（2002）・Isobe and Ura (in press)と同様、優れた内集団成員と共有しているカテゴリーの成員であることによって反映効果を用いつつ、比較他者と共有していない別のカテゴリーの成員であることによって自己評価を維持するという二重の戦略を行っている可能性が示唆された。社会的アイデンティティと個人的アイデンティティの好ましさを共に維持・高揚していくことができれば、それは個人の自己評価の全体を高く維持でき、最も高い適応をもたらすはずである。本研究で示された結果は、そのような自己の状態を得たいという動機づけによって、人が能動的に自己の捉え方を変化させたことを示すものであると考えられる。

別のカテゴリーの主効果も、集団間比較×特性自尊心の交互作用も認められなかったため、別のカ

テゴリー共有度に関する仮説２・４は支持されなかったといえる。Mussweiler et al.（2000）は、低自尊心者に比べ高自尊心者がアイデンティティシフトによる回避戦略を用いやすいことを示している。それに対し、本研究の結果では、別のカテゴリー共有度が及ぼす影響を特性自尊心が調整するという効果は認められなかった。むしろ、３要因の交互作用の結果より、低自尊心者においても別のカテゴリー共有度の効果が認められた。低自尊心者は、集団間下方比較条件において、別のカテゴリー共有条件に比べ非共有条件で、優れた内集団成員を拒否する傾向が低かった。このことから、低自尊心者であってもアイデンティティシフトをおこなった可能性を考えることができる。

このようなMussweiler et al.（2000）の結果との違いは何に起因するのだろうか。その答えとして、別カテゴリーの操作に慢性的利用可能性（chronic accessibility）が高い学科カテゴリーを用いたことがあげられる。本研究の実験参加者が大学の低学年に属しており、日本の高等教育を受けてきた学生であるため、理系－文系カテゴリーは彼らにとって十分に慢性利用可能性が高いカテゴリーであると考えられる。慢性的利用可能性が高いカテゴリーはどのような場合においても顕現化しやすいという（Blantz, 1999）。礒部・浦（2002）・Isobe and Ura (in press)では集団間比較により顕現化させる集団を、学科カテゴリーとし、別のカテゴリーとして性別カテゴリーを用いていた。その理由は、集団間上方比較状況により、学科カテゴリーが顕現化したときでさえ、別のカテゴリーへの焦点移行を比較的可能とするためであった。そのため本実験でも、先述したように、十分に慢性的な利用可能性が高いであろう理系－文系カテゴリーを別カテゴリーとして用いた。我々は、日常生活においても理系－文系カテゴリーを何らかのいいわけの際によく用いる。つまり、日常として使い慣れたアイデンティティシフトであるため、低自尊者にとっても利用しやすい脅威回避戦略であったのかもしれない。

ここで、理系－文系カテゴリーと同様に性別カテゴリーもまた慢性利用可能性が高い集団であるため、どちらがより顕現化したのかについて考察することが重要となる。本研究では、礒部・浦（2002）・Isobe and Ura (in press)と同様に、集団間比較でも用いた性別カテゴリーのほうが、別のカテゴリーとして用いた理系－文系カテゴリーよりも顕現化したといえるだろう。理系－文系カテゴリーがより顕現化しているならば、別のカテゴリー非共有条件より共有条件において、反映過程を用いた結果、拒否が低減されたはずである。優れた内集団成員との比較において、最も顕現化している比較他者との共有（性が同じであること）に注目し反映過程を用い、その他の別のカテゴリーに関して比較他者との非共有を強調し自己評価を維持した可能性が示唆される。このようなカテゴリー顕現性と自己カテゴリー化との関連に注目し、今後さらに詳細な検討をする必要がある。

最後に、実践的な示唆について述べる。本研究では、優れた内集団成員に対する他成員の一見矛盾するかのように思える態度の差異を社会的比較や集団間状況に着目することによって説明することができた。集団間下方比較－別のカテゴリー共有条件で拒否傾向が比較的高かったことから、集団内の個人間比較の際に個人が脅威を感じることが、実際に優れた内集団成員への拒否につながることを例証したといえる。集団内での個人間比較は、競い合うことで個人の成果ひいては集団の成果を高める可能性を持つ。しかしその一方で、集団内での個人間比較は、冒頭で述べたような複数のネガティブな問題をもつ（Juola-Exline & Lobel, 1999; Pappo, 1983）。そのような問題に対し、個人としてどうあればいいのか、集団・組織として、その成員にどのような働きかけをすればよいのか、について考察する。

まず個人としては、内集団の成員からもたらされるネガティブ影響、それによるその成員との関係の劣化を防ぐためには、集団内での個人間関係に固執しないように、ある特定のカテゴリーにアイデンティティを高くおくのではなく、柔軟にアイデンティティ移行が可能となるように、多面的なカテ

ゴリーを所有しておくことが重要であることが示唆される。

次に集団・組織としてはそれをよりよいものにしていくため、成員に対して、集団間文脈に注意を向けて内集団を評価するよう、働きかけることが重要だと考えられる。また、個人が柔軟にアイデンティティを移行できるように、集団・組織内の多様性を高めることが有効かもしれない。集団・組織内の多様性に関して、それが職務集団に及ぼす影響についての研究は盛んに行われてきている。例えば、集団成員の属性による多様性は、集団成員の志向性や価値観の多様化に結びつき創造性が向上する（Schruijer & Mostert, 1997）という報告がある。また、古川（2003）は、集団が成長するに伴って、興味や関心の内部化が進むと述べている。これは、集団活動の安定化と効率化の実現につながると同時に、集団の外部動向に対して興味や関心が薄れて、井の中の蛙現象が目立ち始めることを指摘している。逆を言えば、集団内の多様性を維持することが集団の外部動向への関心の薄れを抑制させうると言えるだろう。したがって、集団・組織内の多様性は、その集団の社会的関係性の変動可能性の見積もりにおいても、集団内の個人間関係に影響を与えるかもしれない。しかしながら、このような知見に対し、集団内の多様性が集団凝集性の低下を導いたり、成員間での葛藤や対立を引き起こす（Pelled, Eisenhardt, & Xin, 1999）というネガティブな事例の報告も存在する。集団・組織内のどのような側面における多様性が、成員の安寧をもたらすのか、集団・組織の実績に影響するのかについて、今後の研究に期待される。

引用文献

Archer, D. (1980). *How to expand your S.I.Q. (Social intelligence quotient)*. New York: M. Evans. and Company.（工藤力・市村英次（訳）(1988)．ボディ・ランゲージ解読法　誠心書房）

Bar-Tal, Y. (1994) The effect on mundane decision-making of the need and ability to achieve cognitive structure. *European Journal of Personality*, **8**. 45-58.

Blanton, H., Crocker, J., & Miller, D. T. (2000). The effects of in-group versus out-group social comparison on self-esteem in the context of a negative stereotype. *Journal of Experimental Social Psychology*, **36**, 519-530.

Blanz, M. (1999). Accessibility and fit as determinants of the salience of social categorizations. *European Journal of Social Psychology*, **29**, 43-74.

Bodenhausen, G. V. & Macrae, C. N. (1998). Stereotype activation and inhibition. In R. S. Wyer, Jr (Ed.), *Stereotype activation and inhibition: Advances in social cognition* (Vol. 11, Pp. 1-52). Mahwah : Erlbaum.

Brown, J. D., Collins, R. L., & Schmidt, G. W. (1988). Self-esteem and direct versus indirect forms of self-enhancement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 445-453.

Brown, J. D. & Gallagher, F. M. (1992). Coming to terms with failure: Private self-enhancement and public self-effacement. *Journal of Experimental Social Psychology*, **28**. 3-22.

Buunk, B. P., Collins, R.L., Taylor, S. E., Van Yperen, N. W., & Dakof, G. (1990). The affective consequences of social comparison: Either direction has its ups and downs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1238-1249.

Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.

古川久敬（2003）．基軸づくり　日本能率協会マネジメントセンター

Goethals, G. R. & Darley, J. M. (1987). Social comparison theory: An attributional approach. In J.

M. Suls & R. L. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives* (Pp. 259-278). Washington: Hemisphere.

Hogg, M. A. & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Routledge.

礒部智加衣（2005）．集団文脈と個人内過程が自己カテゴリー化に及ぼす影響　広島大学大学院生物圏科学研究科博士論文

礒部智加衣・浦光博（2002）．内集団成員との上方比較後の感情・状態自尊心に、集団間上方比較と特性自尊心が及ぼす影響　実験社会心理学研究，41，98-110.

Isobe, C. & Ura, M. (in press). The effects of intergroup upward comparison, trait self-esteem category sharing on the affection and state self-esteem in upward comparison with in-group members. *The Asian Journal of Social Psychology.*

Juola-Exline, J. A. & Lobel, M. (1999). The perils of outperformance: Sensitivity about being the target of a threatening upward comparison. *Psychological Bulletin*, **125**, 307-337.

Luhtanen, R. & Crocker, J. (1992). A collective self-esteem scale: Self-evaluation of one's social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 711-721.

前田賢一郎(1998)．一致への志向性の強さが他者への反応に及ぼす影響　広島大学総合科学部卒業論文（未刊行）

Mussweiler, T., Gabriel, S., & Bodenhausen, G. V. (2000). Shifting social identities as a strategy for deflecting threatening social comparisons. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**. 398-409.

Oakes, P. J., Turner, J. C., & Haslam, S. A. (1991). Perceiving as group members: The role of fit in the salience of social categorization. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 125-144.

Pappo, M. (1983). Fear of success: The construction and validation of a measuring instrument. *Journal of Personality Assessment*, **47**, 36-41.

Pelled, L. H., Eisenhardt, K. M., & Xin, K. R. (1999). Exploring the black box: an analysis of work group diversity, confrict and performance. *Administrative Science Quarterly*, **44**, 1-28.

Pleban, R. & Tesser, A. (1981). The effect of relevance and quality of another's performance on interpersonal closeness. *Social Psychology Quarterly*, **44**, 278-285.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, Nj: Princeton University Press.

Schruijer, S. G. L. & Mostert, I (1997). Creativity and sex composition: An experimental illusration. *European Journal of Work and Organizational Psychology*, **6**, 175-182.

Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An integrative theory. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (Pp. 33-47). Monterey : Books/Cole.

Taylor, S. E., Wayment, H. A., & Carrillo, M. (1996). Social comparison, self-regulation, and motivation. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition* (Vol. 3, Pp. 3-27). *The interpersonal context*. New York: Guilford Press.

Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory.* Oxford: Blackwell.（欄千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美（訳）(1995)．社会集団の再発見　誠心書房）

浦光博（1999）．認知的構造化欲求と構造化能力が自尊心と他者の受容に及ぼす影響　広島大学総合科学部紀要Ⅳ理系編，**25**，171-179.

渡辺聡（1994）．日本語版集合自尊心尺度構成の試み　社会心理学研究，**10**，104-113.

山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，30，64-68.

---

i　本研究には、問題で述べてきた一連の過程に介在する帰属メカニズムを検討するためのいくつかの尺度も含まれていたが、ここではそれらについては記載しない。なお、それらの尺度は本研究で扱った尺度の後に続くものであり、本研究の結果には影響がない。

ii　個人間比較の操作チェックにおいて、Ａさんの能力評価得点から参加者の自身の能力評価得点を引いた差得点を算出し、その得点について集団間上方比較×別のカテゴリー×特性個人的自尊心の共有度の共分散分析（共変量＝集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点）をおこなった。その結果、主効果・交互作用ともに有意な差は認められなかった。

iii　集団間比較の操作チェックにおいて、男性の能力評価得点から女性の能力評価得点を引いた差得点を算出し、その得点について集団間上方比較×別のカテゴリー×特性個人的自尊心の共有度の共分散分析（共変量＝集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点）をおこなった。その結果、別のカテゴリー共有度×特性個人的自尊心の交互作用と３要因の交互作用が有意である傾向が認められた。何がこれらの結果をもたらしたのかについてはさだかではないが、操作チェックへの回答は、全ての要因操作と尺度への回答を終えた後に求めたものであり、それらの操作や回答の過程が何らかの影響を及ぼした可能性が考えられる。